



## 朝日新聞時代の十河巖

著者	岡野 宏
雑誌名	関西学院史紀要
号	26
ページ	43-68
発行年	2020-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028591">http://hdl.handle.net/10236/00028591</a>

# 朝日新聞時代の十河巖

岡野 宏

はじめに

本稿では関西学院高等商業学校を卒業し、朝日新聞に入社、後に大阪の文化施設・朝日会館の館長を務めることになる そごうがんいわち 十河巖（一九〇四～一九八二）の、主に館長就任に至るまでの朝日新聞社における活動を時系列的に検討し、そこに見られる十河の関心の対象を探ることとする。とりわけ朝日会館長就任に至るまでの背景を探ることが目指される。

若き朝日新聞社員

以下に主として朝日新聞時代の十河氏の略年譜を記す。

十河巖の朝日新聞社員としての略歴

- 一九〇四年二月 神戸に生まれる
- 一九二四年四月 関西学院高等商業学部入学
- 一九二八年三月 同卒業
- 一九二八年四月～六月 神戸又新日報社在籍  
（ゆうしん）
- 一九二八年六月 大阪朝日新聞社入社
- 一九三〇年一月 計画部員として正社員となる
- 一九三〇年十一月 社会部に転じる
- 一九三九年春 中国戦線に特派（翌年までには帰国）
- 一九四〇年八月 神戸支局に転じる
- 一九四二年春 ジャワ上陸作戦に記者として従軍
- 一九四二年九月 帰国後、企画部に転じる
- 一九四四年十二月 出版部員として、ジャワ新聞社に出向
- 一九四六年五月 帰国
- 一九四六年九月 朝日会館館長就任
- 一九五〇年春 朝日新聞社主催「アメリカ博覧会」で宣伝部長を務める
- 一九五三年二月 館長退任。企画部勤務となる
- 一九五三年八月 社会部に転じる
- 一九五九年二月 朝日新聞を定年で退職
- 一九八二年一月 神戸にて死去

上記年譜において、やや検討を要するのが神戸又新日報社時代である。又新日報自体が一九三九年に廃刊となっており、当時の状況を示す直接の社内資料を見出すことは現在難しいと考えられる。ここでは状況証拠を積み重ねることで、可能な限り推測を試みたい。

三種の同時代資料から推測を行うことが出来る。即ち一、関西学院側資料、二、朝日新聞側資料、三、又新日報側資料である。

まず関西学院側資料から。関西学院学院史編纂室に残された『関西学院高等商業学部同窓会会報』第九号によれば、十河の卒業後の進路は「神戸又新日報社」であると記載されている。<sup>①</sup>少なくとも三月の卒業時点では又新日報が進路であったことは見て取れるが、これだけでは「実際に」入社したかどうかは確証が持てない。しかしながら、朝日・又新日報双方の資料もこの説を支持するものといえる。

朝日新聞側の資料として活用できるのは、人事情報などが掲載された同時代の「朝日报社報」（朝日新聞社史編修センター所蔵、以下同様）である。その一二〇号には十河が一九二八年六月二日付で「大阪本社計画部練習生」となったとある。「練習生」は当時の朝日新聞社の規定で、入社試験を受けて入った新入社員が、いわば見習いのような形で正式な社員となるまでの数ヶ月間過ごす立場であった。十河は一九三〇年一月に正式な社員となっているが、これは間に入営期間（一九二九年一月～一九二九年十一月、「朝日报社報」一二七号および一三八号）を挟んでいるためである。ポイントは入社時期が六月となっていることである。通常、練習生は毎年四月に入社する（ただし、なぜか一九二八年は三月と四月に分かれている）。二ヶ月間のブランクは短期間であっても又新日報社時代を挟んでいるという仮説を支持するものである。

また又新日報側の同時代資料として活用できるのは、『神戸又新日報』本紙である。すでに先行研究でも明らかにされているように（注一参照）、十河は学生時代に又新日報の一つの面を借りて週一回連載されていた「学生又新」で編集を担当していたが、実は本欄との関係は卒業後も続いている。一九二八年五月七日付号には「同人の晩餐会」と題された記事が掲載され、五月五日に開催された学生編集委員を招いての晩餐会の模様を伝えている。その中で十河は社の人間として参加したと記載されている。また一九二八年六月四日付号では「輯編（ママ）室から」と題された欄が設けられており、そこでは六月二日に開催された学生又新同人の茶会の模様が報告されている。十河はそこでも社側の人間として参加したとある。こうした記述は十河が当初、又新日報社に入社したことを強く裏付けるであろう。そもそも学生時代に新聞研究会に所属し、学生又新を通じて繋がりがあった十河が同社に入るのはごく自然ともいえる。直前まで学生の立場で学生又新に参加していた十河が社側の人間として参加することは、学生たちにとっても気安かったのではないだろうか。<sup>(2)</sup>

「朝日社報」を信頼するなら、二ヶ月ほどで十河は朝日新聞に転じたことになるが、その経緯は不明である。ただ社を移ること自体はそれほど珍しいことではなく、他にも坪田耕吉や森川舟三の例がある。両者はともに当初神戸又新日報に入社したが、後に大阪朝日新聞社に転じている。『神戸又新日報』一九三三年一月二九日付および二月三日付号には、こうした経緯を坪田、森川自身が回想する記事が掲載されており、こうした「転職」は一概に又新日報でも否定的に捉えられていなかったようである。また『河上丈太郎…十字架委員長の人と生涯』に稲岡進が執筆した文章によれば、河上の弟子に朝日新聞関係者が多い（そこには十河も挙げられている）のは河上

と当時朝日新聞で要職を務めていた下村宏(海南)が親しかったためだとい<sup>3</sup>う。一種のコネクションであるが、確証はないものの、十河もその恩恵に与った可能性はあるだろう。河上自身は十河の卒業前、一九二七年十月で関西学院を辞任している。

やや前段階の検討が長くなってしまったが、以下朝日新聞時代に焦点を据えたい。既述のように十河は計画部練習生として入社している。短い期間であるが、十河はこの時代の回想も残している。『朝日人』一九七三年九月号には十河による先輩社員・恩田和子への追悼文が掲載されており、「昭和三年に朝日に入社して翌年の正月に入営するまで計画部にいたわたしは、恩田さんとはほとんど隣り合った席に座っていたので、なにかとお世話になった<sup>4</sup>」と述べられている。

社会部員としての経歴が長く、また自身の経歴を記す際には「社会部」所属と記載することの多かったことからすると意外であるが、一九三〇年一月、十河が最初に正式な社員として所属したのは計画部であった(「朝日社報」一三九号。従って上記の十河の回想は若干、正確性を欠くと言える)。「計画部」について説明を加えておきたい。一九二〇年六月に大阪朝日内に「各種事業の主催、後援などの計画、実施をすすめる」<sup>5</sup>ために計画委員会が設立される。初代委員長には社主・村山龍平<sup>りゅうへい</sup>の娘婿<sup>むすめこ</sup>のちに社長となる村山長拳<sup>ながたか</sup>が就任した。一九二二年一月に改組され、計画部となる。同年十一月には東京朝日にも設立され、東西の体制を整える。東西いずれも初代部長には長拳氏が就任しており、社主家肝いりの組織であったことが伺える。その業務の特性は展覧会や博覧会、航空事業など新聞編集以外の新規事業を開拓することにあつた。一九二七年刊『東京朝日新聞小観』によれば、計画部の業務は「編輯、営業両局以外に特立し、…各種催し物及び宣伝に関する事項を立案しこれを実行する事務一切を掌<sup>6</sup>」るとある。

この計画部時代に、十河は展覧会や講演会等の企画業務の基礎を学んだと考えられる。加えて、朝日会館の運営を行っていた朝日新聞社会事業団の嘱託を併任しており、このことはすでにこの時期に朝日会館の業務に携わっていたことを推測させる。というのも多くの計画部員が事業団の嘱託として、朝日会館の業務に携わっていたからである。既述の恩田和子も同様である（こうした役職については各時期の『社員名簿』（朝日新聞社史編修センター所蔵）によって確認することができる）。入営期間を挟んでいることもあり、実働はごく短期間ではあったものの、本計画部時代に「企画」「宣伝」と関わったことは、結果的には朝日会館長就任への伏線となるものだったのではないか。

## 社会部員としての活動

一九三〇年十一月に十河は社会部に移り（『朝日社報』百四十九号）、労働問題を担当することになる。社報から、その活動の一端を見て取ることができる。『朝日社報』百六十九号「個人消息」には社会大衆党合同大会見学のために一九三二年七月に東京出張した旨が報告されている。また同一九三号では一九三四年七月に大機（大阪機械工作所）争議団籠城及び夏季大学準備のため高野山へ出張とある。

労働運動の取材は十河にとって印象深いものだったようで、後年の文章でもしばしば論及されている。占領期に数号発行されていた雑誌『社会面』の第三号から第六号にかけて、十河は「特だね物語」と題した連載を持っている。そこでは社会部記者時代の労働争議取材が回想されてい

る。第三号では上述の一九三四年の大機争議の模様も回想されており、争議団が高野山に登って籠城することを察知し、他社に先駆けて取材したことなどが記されている。また第四号では戦前の労働組合が新聞を使ってストライキを宣伝しようとしていた面があったとし、記者側でも迂闊に利用されないように気をつけていたと述べている。こうした組合側との神経戦も現場の記者には要求されたようである。また第五号では釜ヶ崎での取材も回想されている。そこでは取材を重ねるうちに、「ルンペン」たちとの交友が生まれ、十河が日中戦争開戦に伴い召集を受けた際には、彼らから見送りを受けたとある。<sup>(7)</sup>

加えて十河は理論的な研鑽も積んでいたようである。すでに学生時代、松沢兼人（一八九八～一九八四）や河上丈太郎（一八八九～一九六五）の薫陶を受けていたことが知られるが、社会部時代に特に注目されるのは大原社会問題研究所に通い、のちに朝日新聞論説委員となる笠信太郎（一九〇〇～一九六七）に教えを受けていたことであろう。<sup>(8)</sup> 笠没後の回想録に十河が寄稿した文章によれば、社会部配属後、労働問題や無産政党を担当するようになり、大原社会問題研究所訪問も受け持ちの一部となったという。練習生時代に入営していた十河は「軍隊に対する反発心もあって」<sup>(9)</sup> 熱心に大原社研を訪ねていったという。そこで当時同研究所に勤務していた笠と出会うことになる。十河による笠の描写は以下のようなものである。

ガリ版刷りの記録書類や古雑誌、労働組合の報告書など、いわばほこりくさい紙屑の山にうずもれた大原社会問題研究所の一室で、笠さんはいつも苦い顔つきで、あまり上等とはいえない木製のデスクに凭って、…考えこんでいた。<sup>(10)</sup>



当時、すでにエコノミストとして名声を博していた笠との対面はやや緊張をともなったものだったようである。しかし当時、現実の事件と直に触れる新聞記者との対話は、笠にとっても刺激になったのではないかと十河は回想している。

こうした大原社研訪問は、同時代の政治情勢でまったく問題ないものではなかった。というのもすでに、労働運動や共産主義に対する圧力を強めていた官憲によって同研究所の関係者が検挙されていたからである。十河は、ほんの数日前に会話した越智道順が検挙されたことに驚かされたという。<sup>(13)</sup> こうしたことから、当時、同研究所を訪れる新聞記者は少なかったと十河は回想する。<sup>(13)</sup>

## 戦争と新聞記者

一九三九年春に十河は中国に従軍記者として派遣されている。正確な出発・帰国時期を示す史料に行き当たっていないが、十河家旧蔵の「自筆経歴」<sup>(14)</sup>には「昭和十四年三月に中支に派遣」とある。また『日本美術年鑑昭和一六年版』には十河が「中支の黄坡」<sup>(註：「陂」に八箇月）</sup>（一四頁）滞在したと記載がある。このことから一九三九年春から秋頃にかけて、黄陂（武漢郊外）に滞在していたと考えられる。<sup>(15)</sup>

一九三九年の大阪朝日新聞本紙および大阪版・中支版には、いくつか十河による記名記事が掲載されている。<sup>(16)</sup> こうした特派員記事を検討することで、新聞記者としての十河の関心の対象を見て取ることが可能であろう。比較的大きな扱いとなっているのは、八月十八日付大阪版に掲載された「陽は沈む・望郷のひと時」である。ここでは文章に加えて、挿絵も十河が担当し（ただし

記者の挿絵が掲載されること自体はそれほど珍しいことではない、本人の写真も掲載されている。ここでは日本軍占領下の黄陂でキャラメルを巡って交わされた日本兵と地元の子供たちとの交流が、叙情的な筆致で描写されている。少し引用してみよう。

真赤に燃える大陸の太陽が高い黄陂城の向ふへ落ちてゆく夕まぐれこそ兵隊さんが最も望郷の念にかられるひとときである——城郭の西側に小さい部落があつて兵隊さんのひとりが高い城壁の上から「小孩！」と呼ぶと附近の子供が瞬間にどやどやと集まつてきて「大人たいじんなんですか」と立派な日本語で答へる、この附近の子供はいずれも○○部隊の宣撫班が経営してゐる難民区の啓明小学校へ通学して大阪東区北浜出身小山健二郎少尉から日本語を教はっている。

兵隊さんは城壁から半身をのりだして「キャラメル進上！」間食として官給されながら食べずにしまつておいたのを「あの小さな小孩に——」と名指して下へ投げる、子供らはさすがに正直なもので、いったん指名された子供があると投げられたキャラメルに折り重なつて見苦しい奪い合ひをするやうなことは決してしない：「一部を除き、ルビは省略した」

記事は兵士達との別れに際し、子供達が「父よあなたは強かった」を歌つて見送つていたと閉じられる。

十河の記名記事を眺めてみると、戦闘そのものよりも、占領後の「宣撫活動」の成果を扱ったものが多いように感じられる。六月十四日付夕刊では日本軍の指導の元、黄陂に同地の指導層の子弟を中心にして初のボーイスカウトが結成されたことを報じている。記事はこうした活動を通

じて「軍事教練や日本語などを教へて次の時代を背負つて立つべき新支那再建の人材を育成」(二面)することを期待している。六月十六日付夕刊では、黄陂で「勤勞奉仕村」が結成され、それまで日本軍を忌避していた村人たちが、自ら申し出る形で地元の道路の補修工事を手伝い、日本軍に保護を求めてきたと報じている。記事はこの工事に日本軍兵士も参加し、「美しい日支親善」(二面)が示されたとまとめている。九月十三日付夕刊では、やはり日本軍主導で地元住民を動員して行われた道路工事の様子が報じられている。興味深いのは、報酬の塩イワシに加えて、各村に蓄音機を貸与して、「愛国行進曲」などを工事作業中に流すことで、「農民らは生れてはじめて聞くレコードのリズムに合わせて鋤や鍬を元氣よく揮ひ、…労働の快味を味はった」(二面)とある点だろう。ここではある種の自発性を持つて地元住民が日本軍に協力する様子が強調されている。また七月二十七日付中支版では「転向新劇団の東亜平和道 江北の奥地深くで」と題して、地元劇団が日本軍の宣撫活動に協力する様が写真付きで報じられている。さらに十月二十四日付中支版では「日本の唱歌流行」と題し、宣撫班によつて中国の小学校で唱歌が広められたことが伝えられている。

他方、日本軍兵士に対する慰問を扱った記事も散見される。五月十四日付大阪版では慰問団の一員として派遣された「わらわし隊」による漫才公演が兵士たちを和ませたこと、六月十六日付大阪版では大阪市西区の校長たちが黄陂にて兵士慰問のため尺八を披露したこと、九月二十二日付大阪版では大阪から慰問として兵士たちに菊の造花が贈られたことが報じられている。また五月二十四日付中支版では兵士の慰安のために、鵜飼用のフロートを製作したとある。

勿論、こうした「日本軍が現地で受け容れられていること」や「日本軍兵士が戦地にあつても

娯楽を楽しんでいること」を示す記事は十河に限ったものではないが、やはり関心をもって取材していることは伺える。このほか『アサヒカメラ』一九三九年九月号に執筆した「野戦写真術」<sup>(9)</sup>は、中国滞在時期に培われた実践的な体験談を含んでいる。

一九四〇年一月十九日から二十三日にかけて朝日ビル内の大阪美術新論社画廊にて「十河巖従軍スケッチ展」を開催している。確認される限り、これが十河の初の個人展覧会であるが、大阪朝日新聞一月十九日付朝刊でも「十河従軍記者の「戦線作画個展」と報じられている。表題に見られるように、従軍中に描き貯めたスケッチなどが展示内容であった。

後年の文章では、しばしばこの中国時代も回想されている。『新中国…演劇・文学・芸術』第三号に発表した「京劇美学」では「中国解放前に、蘇州、杭州、南京、漢口あたりで京劇や越劇をのぞいた」<sup>(18)</sup>ことがあるとしているが、これは従軍記者時代と考えてよいだろう。十河は京劇の持つ「演劇性そのものの面白み」を強調するが、そうした京劇の「純粹性」を同時代の現代音楽や抽象美術のそれと比している点は、ある種の「形式主義的」芸術観を示している。さらに京劇への関心は『あの花この花 朝日会館に迎えた世界の芸術家百人』（中外書房、一九七七年）に梅蘭芳<sup>めいらんほう</sup>の頁が設けられていることにもつながる。『ザラ紙随筆』所収の「河童にインタービュー」では漢口の骨董屋で乾隆帝時代の古墨を入手したことを回想している。中国で触れた様々な事象は十河に新鮮な印象をもたらしたようである。

一九四〇年八月からは神戸支局に勤務となる（「朝日社報」一二六六号）。この時期のエピソードとしては一九四一年八月に八月十八日付大阪本社版（一九四〇年九月より大阪朝日新聞社は朝日新聞大阪本社となる）朝刊五面「山陰線の列車転覆」報道写真によって八月分の本社写真賞を

受賞したことが挙げられる（『朝日社報』二八〇号）。また、それに先立つ形で『アサヒカメラ』一九四一年五月号に「報道写真の将来と「窓新聞」の意図」を執筆している。これは断片的ながら、十河の持つ「報道写真」観が伺えるテキストになっている。十河によれば、日本の報道写真にはいくつかの問題がある。一つは「ニュース・センスの貧困」である。写真家や読者が写真の芸術性にこだわるあまり、真実の写真と演出されたその区別をつけなくなってしまうことを十河は批判する。他方で、多くの報道写真でニュースの「ねらい」を強調する「説明」が欠けていることを批判する。十河は「説明」を「ねらい」を効果的にもりあげる工夫<sup>19</sup>と定義した上で、そうした工夫の必要性を説く。この時期、十河は「報道写真」のスペシャリストと看做されていたようである。

「報道写真」というジャンルの同時代的な意味について確認しておく必要があるだろう。メディアア史研究者・井上祐子は新体制運動のもと、報道写真にも宣伝効果を期待する論説が出されるようになったとする。<sup>20</sup> 上述の十河の「報道写真」観は同時代に見られる、時に事実に反する過度な「演出」を推奨するような傾向とは異なるものの、「ねらい」の「説明」を要請している点で、その宣伝効果には自覚的であるといえるだろう。

一九四二年春には日本軍のジャワ上陸作戦において、記者として軍宣伝班に従軍する。その模様を記した『ジャワの旋風 戦後の文化の探訪』が帰国後の一九四三年に出版されている（本書の口絵写真は十河が担当している）。本書は三部に別れ、第一部「ジャワ作戦従軍記」が上陸作戦から占領までの顛末、第二部「ジャワ縦走記」が現地での宣伝工作、第三部「戦後ジャワ」が占領後の日常を扱っている。なお、その内容の幾つかは一九四二年に朝日新聞大阪本社版本紙に

掲載された十河の記名記事と対応している。<sup>(21)</sup>

同書の「後書」でジャワ滞在は「数ヶ月にも満たない」ものであったとしつつ、十河は「私の眼に触れ、耳にはいった事柄を素直に書きのべ、専ら戦後目醒しく興隆しつゝ、あるジャワ事情の紹介につとめた」という。<sup>(22)</sup>「序」を担当しているのがジャワ派遣軍前宣伝班長陸軍中佐・町田敬二であることからわかるように、本書が日本軍のジャワ占領の成功とその正当性の主張を大きな眼目としていることは確かであろう。<sup>(23)</sup>

宣伝班に配属されたという事情から、本書では軍の宣伝・宣撫活動が重点的に紹介されている。「ジャワ・バリー島を自動車で一周して文化資料を蒐集調査し、その傍ら原住民に対する宣撫工作を行って、なに余力があれば各地に駐屯中の皇軍部隊を慰問」<sup>(24)</sup>するために結成された「ジャワ・バリー巡回宣撫隊」に十河は随行する。四月十六日には「原住民宣撫」のために最初の映画会が開催されたことが紹介される。さらに、その翌日には駐屯軍のための映画会が開催されている。こうした宣撫活動に十河がどのくらい具体的に関わっていたかは不明であるが、映画会における観衆の反応などもつぶさに記録していることから、関心をもって接していたことがわかる。四月二十八日には王宮に入り、王族向けの映画上映会が行われる。十河は特に彼らの反応に関心を持ち、映画会終了後に二・三の王族に感想を求め、その夜にはスルタンやその兄弟を交えた「映画批評会」(『ジャワ』一六四頁)を計画している。なお、一九四二年五月五日付朝日新聞大阪本社版でも「ジヨクヤ王と日本映画」と題し、この映画上映会の模様を、王族の感想を引きつつ紹介している。

一九四三年には同じく朝日新聞社員である大内秀邦との共同原作による紙芝居『神風』の飯

沼正明』を出版している。飯沼正明は一九三七年に大阪朝日新聞社航空部員として、同社の航空機「神風」号に乗り、東京―ロンドン間最短（当時）飛行に成功した経歴の持ち主である。十河が執筆に参加したのは同じ朝日新聞社員であったためと考えられるが、宣伝に携わる才能を買われたからかもしれない。というのも飯沼は不慮の事故により、一九四一年に亡くなるのだが、その生涯と死は、ある種の美談として受容されていたからである。紙芝居の末尾は以下のように結ばれる。

彼によって、先ず開かれた南方航空路は／今や 大東亜を結びとなり、／枢軸諸国を結ぶ路となっただけでなく／敵都ロンドンを目指して 突撃する 空の路なのである。

こうした記述からは、本書が朝日新聞社と太平洋戦争双方の「宣伝」となることが期待されていたことが伺える。

十河は一九四三年九月一日に神戸支局員から当時の企画局大阪本社企画部に転じる（『朝日社報』二九一号）。企画部は先述の計画部の後継組織である。十河と朝日会館との濃密な関わりが生じるのはこの企画部時代と考えられるが、その前に少し時間を巻き戻して一九三八年の「朝日会館・レコード鑑賞会」について見ておきたい。一九三八年五月に朝日会館内の企画として同鑑賞会が設けられる。もともと朝日会館では毎月の新譜レコードを演奏する「新譜鑑賞会」が各レコード会社の主催によって行われていたが、本企画は社会事業団主催のもと、複数人の専門家によって構成された委員会が選定したレコードを演奏する企画が一九三八年六月から開始されてい

る。朝日会館の機関誌『會館藝術』（一九三一年～一九四一年）の一九三八年六月号には同鑑賞会の会員募集の広告が掲載されているが、委員には指揮者・朝比奈隆、作曲家・須藤五郎、作曲家・大澤寿人など著名な音楽家・音楽評論家が並んでいる。加えて朝日会館から下山英太郎事務員と大阪朝日本社から社会部員・十河巖と学芸部員・松本憲逸<sup>けんいつ</sup>が参加している。おそらくは朝日関係者三名は選定にも参加しつつ、意見集約を図る立場であつたと考えられるが、十河と松本は必ずしも朝日会館の運営と直接関わる部署に属していたわけではない。その点、なぜ十河が本委員会に所属することになったのか、またいつまで関わっていたのかは判然としない。ただ、少なくとも一九三八年時点で会館との繋がりがあつたことは確実である。

一九四三年に話題を戻したい。この時期、十河は社会事業団の後継組織・厚生事業団の嘱託を併任し、朝日会館の運営にも携わるようになる。とりわけ『會館藝術』後継誌である『大阪文化』（一九四三年七月）『厚生文化』（一九四四年五月）の編修に深く携わっていた。『大阪文化』一九四四年三月号では「第二回大東亜戦争美術展合評」司会を、『厚生文化』一九四四年六月号では「『農村図書館』座談会」司会を務めている。興味ぶかいことに、すでに言及したジャワの王族との「映画批評会」とここで十河が行っている座談会司会は意外な一致を見せている。とりわけ美術展合評のように、何らかのイベントに対する批評を複数人から集めるという姿勢は後の『デモス』の記事にも見受けられるものであり、ここには十河の継続する志向を認めることができる。<sup>(26)</sup>

十河は一九四四年十一月十三日には、朝日新聞に籍を残しつつ、ジャワ新聞社出版部に就任し（『朝日社報』三三八号）、同年十二月十二日にジャカルタに到着し、総合雑誌『新ジャワ』編<sup>(27)</sup>



集に携わるようになる。ジャワ新聞社は一九四二年、朝日新聞によって設立された現地の新聞社である。朝日会館の業務からは退くこととなったが、『厚生文化』一九四五年二月号には、「ジャカルタより」と題した近況報告が掲載されている。編集部から序言として「本誌の前編輯者として読者諸兄にお馴染み深いガンちゃんこと十河巖氏から、このほどジャカルタに安着の第一報がありました」<sup>(28)</sup>という報告があった後、以下のような十河からの便りが掲載される。

前略…小生去る十二日（十二月）無事ジャカルタに到着いたしました。…こちらでは報道班員の訓練が毎週木曜日にありまして汗だくになって四千米づる無休止で走ります。内地が冬だと考へるとおかしいくらいで、毎日四回ぐらい水を三十パイぐらいかむって漸くいきをついてゐます。…（ガンより）

「ガンちゃん」と愛称で呼ばれるなど、一編修者として以上に親しまれていたようである。

また十河はこの時期本名に加えて、「雁三五」<sup>(29)</sup>という筆名で執筆を行っている（執筆文献については註二九参照）。十河名義としては『大阪文化』の創刊号である一九四三年六・七月号に「ジャワの混血児」を発表している。編集者としてのみならず、執筆者としても十河は朝日会館の機関誌読者に名が知られていたのである。『新ジャワ』において、十河が具体的にどのような作業を担当していたかは不明であるが、こうした雑誌編集の経験が買われた可能性は大にある。<sup>(30)</sup>

終戦をジャカルタで迎えた十河が現地での強制労働を経て帰国するのは一九四六年五月のことである。同年九月一日付で再び企画部に戻り（『朝日社報』三四〇号）、同時に厚生事業団主事

（朝日会館主事）、すなわち朝日会館長に就任する。<sup>(31)</sup>これまでの十河の経歴を検討するなら、この人事にはほとんど不自然なところはないといえる。そもそも入社当初、計画部に所属していたこと、さらに一九四二年以降企画部員となり、朝日会館の運営に関わっていたことがその背景となっている。<sup>(32)</sup>

### 館長就任以降の活動

会館長時代の十河の活動で一つ興味ぶかいのは一九五〇年三月から六月にかけて西宮球場とその周辺で開催された朝日新聞社主催の「アメリカ博覧会」で宣伝部長を務めていることである。<sup>(33)</sup>博覧会開催後に刊行された『アメリカ博覧会』という大判の記念誌には、豊富な広告関連の記録も掲載されており、それらの多くに十河が関わっていたものと考えられる。なぜ十河が宣伝部長に選任されたかは定かではない。しかし、これまで見たように戦時中に十河は「宣伝」的なものと直接・間接に関わっていたのである。こうした背景が全く無関係とはいえないだろう。<sup>(34)</sup>

一九五三年二月に十河は会館長を退任する。暫く企画部に籍を置いたのち、古巣の社会部に戻り、一九五九年の停年まで同部に在籍することになる。<sup>(35)</sup>十河の回想に拠れば、この時期は主として展覧会などの文化方面の取材を行っていたようである。『ザラ紙随筆』所収の「わたしの「せんだく機」」には社会部に戻った時期のことが回想されている。十河は当時の記者たちの仕事ぶりを評価しつつも、「暴露精神」や「特ダネ根性」が希薄になっていくのではないかとする。『社会面』の一連の連載にも見られるように、「特ダネ」を探して歩き回ることに、取材の意義を見

出していたようである。

退職直前の時期にも執筆活動は旺盛に行っている。意外ではあるが、十河が館長を勤めていた時代に朝日会館が支援していた労音（勤労者音楽協議会）と政治的には対立していた大阪音楽文化協会の機関誌『音楽文化』に盛んに寄稿を行い、複数の巻号では表紙も担当している。これは関西交響楽団（現大阪フィルハーモニー交響楽団）を通じた鈴木剛（<sup>36</sup>当時の大阪音楽文化協会会長）との個人的な繋がりによるものかもしれない。十河は鈴木<sup>36</sup>の随筆集『金庫と提灯』（生活新社、一九五二年）で「装釘」を担当していることから、両者には社を通じただけではない、個人的な交流があったことが伺える。

おわりに

本稿の性格上、何らかの大きな結論を提示することはできない。あくまで現段階までの調査から見出される内容を最後に提示しておきたい。十河の朝日新聞時代を概観したときに、社会部員として熱心に労働運動の現場取材をこなす姿と、計画・企画部員として「企画」「宣伝」に才を発揮する姿を見出すことができる。後者の活動において大きなウエイトを占めるのは朝日会館長時代であり、本稿では中心的には扱わなかったが、社会部時代においても、記事内容からそうした事象に関心を抱いていることは示されたと考える。また朝日会館長としての十河の活動と社会部員時代が無関係とも言えない。というのは労音や労演への支援に見られるように、労働者との関わりもそこで維持されていたからである。<sup>37</sup>その意味では朝日会館長としての活動には、それま

での朝日新聞社員としての活動から得られた経験が十分に反映されているといえる。

こうした二つの志向は関学時代にすでに萌芽的に見受けられるものである。一方では、河上や松沢に教えを受けたことや新聞研究会などに所属したことが政治・社会への関心を強める契機となっただろう。他方で、当時の関学における盛んな学生サークルという環境もあったと考えられる。十河が参加していた講演部・弦月会はもちろんのこと、演劇部が朝日会館で公演を催すなど、当時の学生サークル活動は想像以上に大きな企画をこなす能力があった。十河の持つ両面性も、こうした関学の環境を十分に吸収した結果ともいえるのではないだろうか。

【注】

- (1) 『関西学院高等商業学部同窓会会報』第九号（一九二八年、関西学院学院史編纂室所蔵）、一三七頁。津金澤聰廣「地域新聞にみる一九二五年から二九年（上ヶ原移転）までの関西学院情報―『神戸又新日報』を中心に―（上）」（『関西学院史紀要』第八号、四五―八二頁、二〇〇二年）では、十河の学生又新での活動が紹介されるとともに、学院史編纂室主管・池田裕子氏の調査成果として、十河が卒業後又新日報に入社したという説が提示されている。本稿の見解は、複数の補足資料を提示しつつ、この説を支持するものである。
- (2) 学生又新で十河の名前が見られるのは六月四日付号が最後である。なお学生又新欄は確認される限りで一九二八年七月三十日付号を最後に途絶えている。あるいは十河が退職したことによって、ならか編集体制に不備が生じたために途絶したのかもしれない。
- (3) 稲岡進「心に残る先生であった」『河上丈太郎…十字架委員長の人と生涯』（日本社会党機関紙局、一九六六年）、二四七―二四八頁。
- (4) 『朝日人』一九七三年九月号（朝日新聞社史編修センター所蔵）、九九頁。十河の回想によれば、社

会部に移った後の昭和六、七年頃に同じく朝日社員で洋画家の古家新や恩田と連れ立って紀州の雑賀崎に写生に出かけたこともあったという。また戦争直前には恩田から絵具や筆を贈られたこともあったといい、仕事を離れた趣味の領域でもつながりがあったようである。

(5) 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、一九九五年）、一一四～一一五頁。

(6) 東京朝日新聞社編『東京朝日新聞小観』（東京朝日新聞社、一九二七年）、一八頁。

(7) この逸話は『ザラ紙随筆』所収「日本版・夜の宿」（初出『DENOS』一九五〇年一二月号、原題は「夜の宿 出世すごろく」）でも紹介されている。また朝日新聞大阪本社社会部編『中之島三丁目三番地―大阪社会部戦後二十年史―』（朝日新聞大阪本社社会部、一九六六年、非売）所収の「松竹歌劇の葬儀と高野山代表三僧の調停」でも争議取材の様子が臨場感をもって描かれている。

(8) 河上との交流は後年まで続いており、翻刻刊行された『河上丈太郎日記』（関西学院大学出版会、二〇一四年）にはしばしば十河との面会の記録が登場する。一九四九年四月二十五日には夕食を十河らと摂ったこと、また朝日会館で女優・山本安英を観劇した（当日は劇団民芸による木下順二作『山脈』の公演が行われている）ことが記されている。一九五〇年十二月二十一日には十河と有楽町で鰯を食べたとある。これらは十河が朝日会館館長時代のものであるが、館長退任後も一九五五年九月十二日、一九五六年二月六日、一九五六年八月四日、一九五六年十一月三日、一九五七年六月十四日に十河、場合によってはその他の人々と面会したとある。一九五六年十一月三日には十河とともに文楽を観劇したとある。また一九五七年二月二十七日には十河の大阪三越での個展を観ている。さらに十河が朝日を退職した後も、一九六二年七月十四日、七月十五日、七月十六日にかけて「十河画房」と名付けられた十河のアトリエに入り、絵のモデルになったようである。日記は一九四九年から六五年までしかカバーされていないが、それ以前にも密な交流がなされていたものと考えられる。

なお十河はすでに学生時代に「学生又新」一九二八年一月九日号に「俸給生活者と社会科学」

と題する短文を執筆しており、学生時代から社会思想には関心を持っていたことが伺える。

- (9) 笠は一九二八年から大原社会問題研究所助手となり、一九三一年に研究員に就任する。一九三六年には東京朝日新聞社に入社し、同年論説委員となる。

- (10) 十河巖「三等寝台で」「回想 笠信太郎」(朝日新聞社、一九六九年)、七二頁。

- (11) 『回想 笠信太郎』、七一頁。

- (12) 越智の検挙は一九三三年三月のことであり、同時に細川嘉六も検挙されている。容疑は共産党シンパ活動による治安維持法違反であった。

- (13) 一九五一年十月十六日に十河は朝日会館創立二十五周年記念講演会を企画しているが、そこでは笠に加えて、大原社研の創立者孫三郎の長男・大原総一郎が講演している。この人選は大原社研(当時、すでに東京に移転していた)との心情的共感を維持していたことを示唆するであろう。なお総一郎は十河が館長を勤めていたころの朝日会館の機関誌『デモス』において数回にわたって海外の音楽事情を紹介する連載を持っている。

- (14) 現在は関西学院大学博物館に所蔵されている。

- (15) ただし十河の著書では異なった記載も見られる。例えば『ザラ紙随筆』(現代人社、一九五八年)奥付では「昭和十三年特派員として中国に渡る」とあり、『随想・金魚と少年』(明石豆本らんぶの会、一九七二年)「けいれき」では「昭和十三年春」中国に特派されたとある。しかし本文で後述するように、十河は一九三八年六月には「朝日会館・レコード鑑賞会」推薦人の一人に就任しており、少なくとも昭和十三年春に派遣されたというのは現実的ではないと考える。また『會館藝術』一九三八年十一月号には「お婆さんの家族」を発表しており、この時点でも本土にいたと考えるのが自然であろう。

- (16) 筆者が確認できた限りでは、本紙では一九三九年四月二十日朝刊一面(連名記事)、五月十日朝刊十一面、五月二十三日朝刊二面、五月二十八日朝刊一面、五月二十八日朝刊二面、六月十四日

夕刊二面、六月十八日夕刊二面、七月二十六日朝刊二面、七月三十一日朝刊二面、九月十三日夕刊二面、九月十五日朝刊二面、九月十五日朝刊二面に記名記事を認めることができた。

大阪版は四月二十八日、五月十四日、五月二十四日、五月二十九日、六月十六日、八月十八日、九月十二日、九月二十二日に記事を認められた。

中支版には以下の日付に記名記事が見られた。ただし上記の本紙・大阪版の記事と内容的に一部重複する。五月二十四日、五月二十四日（別記事）、六月二十二日、七月二十五日、七月二十七日、八月八日、八月十日、八月十三日、八月十七日、九月九日、九月十五日、十月五日、十月十二日、十月二十四日、十月三十一日。なお北支版でも大半の記事が重複していた。最後の記事の日付から、少なくとも十月末ごろまでは中国に滞在していたものと思われる。

(17) 『野戦写真術』『アサヒカメラ』一九三九年九月号、四三八―四四〇頁。肩書きには「特派員として中支・黄陂」とある。

(18) 『新中国…演劇・文学・芸術』第三号、一九五七年二月、一頁。『ザラ紙随筆』、七四―八〇頁。

(19) 『アサヒカメラ』一九四一年五月号、七一七頁。

(20) 井上祐子『戦時グラフ雑誌の宣伝戦―十五年戦争下の「日本」イメージ』（青弓社、二〇〇九年）。特に第五章「狭隘化する「報道写真」とグラフ雑誌」参照。

(21) 朝日新聞大阪本社版本紙には下記の日付で記名記事が掲載されている。三月十一日朝刊一面（連名記事）、三月十一日夕刊一面、三月十一日夕刊二面、三月十二日朝刊一面（連名記事）、三月十三日朝刊三面（連名記事）、三月十四日夕刊一面（連名記事）、三月十四日夕刊一面（連名記事、別記事）、三月十四日夕刊一面（連名記事、別記事）、四月二日朝刊三面、四月二十五日朝刊三面、四月二十五日朝刊三面（別記事）、五月一日夕刊二面、五月五日朝刊三面。五月一日号では「忽ち「日本万歳」の鯨波」と題し、演説や紙芝居による宣撫工作が成功を収めたことが報じられている。また帰国後の一九四二年七月三十一日および八月一日の夕刊に「南方新話題 ジャバ原住民の素描」

という記事を書いている。

(22) 『ジャワの旋風 戦後の文化の探訪』(宋栄堂、一九四三年)、「後書」。

(23) 十河は『海』一九四三年四月号にも「ジャワ原住民はいかに上陸部隊を迎えたか」を発表している。

(24) 『ジャワの旋風』、一一五頁。同部隊には作家の武田鱗太郎や漫画家の横山隆一も参加していた。

(25) 「楽壇人推薦コロムビア・ピクチャー・ポリドール新譜演奏会―朝日会館・レコード鑑賞会・定期会員募集―」『會館藝術』一九三八年六月号、二六頁。

(26) 『デモス (DEMOS)』は一九四七年六月以降刊行された『會館藝術』の後継誌。『デモス』刊行時期はまるまる十河が朝日会館館長を勤めていた時期と重なるが、朝日会館での催物に対して複数の識者が短評を述べる欄がしばしば設けられていた。

(27) 倉沢愛子によれば、『新ジャワ』は一九四四年十月創刊の日本語の月刊誌である。一九四五年八月号まで計十一冊が刊行された。発行元のジャワ新聞社はこのほかに『ジャワ・バル』という隔週誌を刊行していたが、グラビア中心の後者にたいして、前者は論説を多数掲載し、より格調が高いものだったという。倉沢愛子「解題」『南方軍政関係史料④新ジャワ 上巻』(龍溪書舎、一九九〇年)、一―三頁。十河が第何号から関わるようになったかは定かではないが、創刊直後に転任が決まったことになる。

(28) 『厚生文化』一九四五年二月号、二五頁。次の引用も同様。

(29) 「雁三五」は十河巖の筆名であると考えられる。その読みはおそらく「がん・そうご」であろう(この示唆はヘルマン・ゴチエフスキ氏から頂いた)。これはちょうど「そごう・がん」の前後を入れ替えたものであり、また十河が自らの絵画作品に署名する際は「Gan Sogo」と書いていたことも一致する。

確認できているだけでも、以下の文献が雁三五名義で執筆されている。

雁三五「風呂と水浴」『大阪文化』一九四三年八月号、二二―二四頁。



雁三五「戦争と自転車」『大阪文化』一九四三年十一月号、一九〇二二頁。

雁三五「決戦服飾」『大阪文化』一九四四年四月号、四〇〇四二頁。

雁三五「戸を叩く男」『社会面』第六号、一九四八年、三五〇三七頁。

雁三五「メニューヒンの眼」『DEMOS』一九五一年十月号、一九〇二〇頁。

雁三五「その夜の出来事 辻・諏訪・巖本の三女流ヴァイオリニストについて」『DEMOS』一九五一年十二月号、二二〇二四頁。

雁三五「日本芸術の海外紹介」『DEMOS』一九五二年四月号、一六〇一七頁。

雁三五「コルトー人物記」『DEMOS』一九五二年十二月号、二四〇二五頁。

雁三五「入場税値下げ裏おもて」『會館藝術』一九五三年一月号、三四〇三五頁。

雁三五「夫婦山分け料理」『Hotelの四季』（オリエンタルホテル、非売）刊行時期不明、六一〇六四頁（十河家旧蔵。現在、関西学院大学博物館所蔵）。

雁三五「都会の孤島」『ホテルの四季』（オリエンタルホテル、非売）第三号、刊行時期不明、六〇〇六四頁（十河家旧蔵。現在、関西学院大学博物館所蔵）。

既述の『社会面』連載は、他の号が本名での執筆であるのに対し、最後の第六号だけが雁名義となっている。一覧の通り、少なくとも一九四〇年代から、オリエンタルホテル顧問であった一九六〇年代頃まで、この筆名は用いられていることが分かる。このほか十河は確認できているだけでも「十河祝」「十河雁」「河雁」の筆名を用いている。

(30) 姫本由美子「日本占領下のインドネシアをめぐる「報道」と「宣伝」のはざま——朝日新聞社所蔵写真を手掛かりに——」『アジア太平洋洋討究』第二十八号、二〇一七年、二六一〇二九一頁）では、一九三〇年代から一九四五年までのインドネシアに関連する朝日新聞社所蔵写真のなかに一点、十河の記名のあるものが含まれていることが明らかにされている。

(31) 本稿では会館長としての十河の活動については詳述しない。詳細は中村仁「文化活動の推進者」・

十河巖―朝日会館館長時代を中心に」(『関西学院史紀要』第二十六号、二〇二〇年、六九―一〇七頁)を参照されたい。

(32) さらにいえば、学生時代にすでに、そうした企画ごとへの関心があつたと考えられる。下記文献参照。岡野宏・中村仁「いま十河巖氏に注目すること―関学時代から戦後にいたるまで」『学院史編纂室便り』第四十九号、二〇一九年、二―六頁。

(33) 平井常次郎編『アメリカ博覧会』(朝日新聞社、一九五〇年)、一一八頁。アメリカ博覧会で具体的な作業を担当したと考えられる事務局の顔ぶれから、この企画が企画部を中心になされたことが分かる。事務総局長には平井常次郎・企画室長(企画室は一九四九年に設立された東京・大阪・西部三本社の企画部を束ねる上位組織。一九五二年に廃止される)が就き、次長には葉健二・企画室副室長が、企画本部長には鶴秀茂・大阪本社企画部長が就任している。十河の宣伝部長就任もまずは企画部員としてのものだったといえる。

(34) 十河は朝日新聞退職後にも宣伝の仕事に携わっている。一九五九年にはサントリー本社宣伝部嘱託に就任し、後に『宣伝の秘密・サントリー宣伝物語』(邦文社、一九六六年)を執筆している。同書の前書きによれば、その元になったのは一九六三年から二年に渡り、サントリーの社内報『まど』に連載された文章である。小玉武者『洋酒天国』とその時代』(筑摩書房、二〇〇七年)では、自身宣伝部に所属していた著者の回想として、一九六二年頃に本社宣伝部で、十河がしばしばデスクで新聞を読んでいたとある(四三頁)。また一九六三年にはオリエンタルホテル顧問に就任しているが、同ホテルが発行していた『ホテルの四季』という豆本冊子の第三号に「雁」として編集後記を執筆していることから、その編修にも携わっていたと推測される。各社での活動の詳細については、今後の課題としたい。

(35) 十河巖「もつと評価されてもいい吉原治良の業績」『トミー(関西学院高等商業学部昭和三年卒業級友会誌)』第三号、一九七二年十二月、八頁。

(36) 関西交響楽団や鈴木については中村論文参照。

(37) 会館長在任中には「労働組合と文化運動」(『月刊労働』一九五二年八月号、二〇三、八頁)という文章を発表している。本記事は『ザラ紙随筆』にも所収されている。

※本稿では、現在では差別的と捉えられる恐れのある表現が引用文等で用いられているが、時代背景を考慮し、原文ママとした。

※本稿は平成二十八〜三十一年度科学研究費補助金基盤研究C「『朝日会館』を巡る文化活動の記録化とその歴史的影響の分析(研究課題番号16K02301)」(代表者・山上揚平)の助成による資料調査に基づいている。調査に当っては、池田裕子・関西学院大学学院史編纂室主管に大きなご助力をいただいた。また資料調査を快諾してくださった十河巖氏のご遺族にも深く感謝したい。